

# 太陽笑顔 fufufu..

ROHTO

MESSAGE MAGAZINE

2011 Vol.3

WINTER

無料 | FREE

ずっと健康に歩きたいから  
**膝痛予防&  
改善計画。**

fufufu..なGourmet  
頑張れ宮崎！  
尾崎牛の希望。

epiism  
京和傘『日吉屋』の  
モノ作り。

パワースポット巡礼  
国東半島へ、  
開運祈願の旅。

fufufu..interview  
書画家・麗清さんの  
美の秘訣。

目指すのは、  
冬に負けない肌作り

# 敏感肌を 克服する。

いよいよ『京都高島屋』での販売もスタートし、京都ともますます縁が深くなった新エイジングスキンケア「エビステーム」。今回は京都の伝統的なモノ作りの現場に「日本の美」をみつけ、京都で唯一の和傘製造元である『日吉屋』をお訪ねしました。

京都の伝統工芸に目覚め、転職して飛び込んだ道。だからこそ分かることも。

京都市内の小さな工房。和紙を張



工房で完成したばかりの色とりどりの和傘。これらは伝統の技法を受け継いで作られたもの。色使いもデザインも昔のまま



自宅を「和傘照明」のショールームにもしてPRにつとめる西堀さん

# 京都のモノ作りは 伝統と革新の連続。

## 西堀耕太郎さん

### 京和傘『日吉屋』五代目店主

京都の老舗和傘屋の若き店主は、  
伝統を守るだけでなく革新的発想も。  
『日吉屋』五代目・西堀耕太郎さんに  
そのチャレンジを伺いました。

写真／福森クニヒロ

にしほり こうたろう ● 伝統工芸・京和傘『日吉屋』五代目店主。和歌山・新宮市役所での勤務を経て傘職人に。2006年から制作を始めた和風照明「古都里-KOTORI」ではグッドデザイン賞を受賞。近年は海外への進出にも意欲的。和傘を茶室に見立てた「折りたたみ茶室」などユニークな創作活動も行っています



日吉屋

京都市上京区堀川寺之内東入ル  
百々町 546

☎ 075-441-6644

蛇の目傘や日傘といった日常の和傘からお茶席の野点用の特殊な和傘まで製造販売。新しく和傘をアレンジした照明も製造販売。工房見学や体験工房なども開催

り終えたばかりの大きな蛇の目傘が目  
に飛び込んできます（写真上）。

「和紙の風合いが古典的で素敵。内  
側の糸飾りはとても繊細ですね。和  
傘ってとても凝った工芸品なんですわね」

「僕も和傘を初めて見たときは、カッ  
コイイなあって思いましたよ。その思い  
を今でも大切にしていますね」

と話すのは『日吉屋』五代目店主、  
西堀耕太郎さん。実は西堀さんは元公  
務員。奥様の実家が『日吉屋』で、後  
継ぎがないことを憂い自ら傘職人の

道に飛び込んだのでした。

「勤め先が休日の週末ごとに通って修業を重ねました。最初はお手伝い気分でも簡単なようで二度と同じものができない和傘作りの奥の深さに心打たれて、自分の生涯の仕事にしようと思えました」

そして切磋琢磨を重ねて五代目店主となった西堀さん。気がつけば店は京都で唯一の京和傘の製造販売店になっていました。伝統工芸品としては高い評価を得ても、日常に生活では使う機会の少なくなった和傘。これを生き残らせるためにはどうすればいいの  
か？ 西堀さんは苦悩しました。

## 和傘の伝統を守って 老舗の技術力を活かす 「老舗ベンチャー」

そして、和傘の実力を京都の外から来て知った西堀さんだからできる和傘の革新にチャレンジします。それは和傘を照明にしてみましょう大胆な試み。

「和傘作りには細かく分けて数十もの工程がありますが、和紙を張った後太陽の光で乾かす作業があるんです。その作業中にひらめいたんです。太陽の代わりにランプを灯したらどうな



西堀さんの自宅ショールームに飾られた「和傘照明」。シェードに透かし模様が入った和紙を使用。伝統の技法とデザインが生きています

るか？ っ。実際にやってみたらとてもいい感じだったので、和傘の形もアレンジして試作の照明を作ったのがきっかけでした」

「和傘がモダンな照明に生まれ変わった瞬間ですね」

「伝統は革新の連続だと思っんです。和傘の歴史は千年以上あるけれど、現代では工芸品としてしか使えようがない。でも、僕は和傘が千年かけて培った伝統、技術、構造は現代でも違う形で活かせると確信していました。そしてたどり着いたのが照明だったんです」  
「京都のモノ作りは伝統を継承するだ

## 岡野亜矢子(右)

ロート製薬  
マーケティング本部勤務

おかの あやこ ● 2010年よりプレステージスキンケア事業部「エビステム」担当。「京都のモノづくりの伝統と革新の中にエビステムが目指すモノ作りの心得を今回は学びに訪れました」



けでなく、革新へと変化しながら生き残っていくものなんですね」  
「僕はそれこそ、老舗ベンチャー」だと思っっています。ですから照明にとどまらず、さらに新しい和傘の可能性も模索していきたいと思っっています」  
「転職してまで伝統を受け継いだ西堀さんだからできる革新の展開ですね」

## 取材を終えて

伝統工芸の職人というイメージを心地よく裏切ってくれた西堀さん。照明にとどまらず、「次はこんなことも考えているんです」と本質を大切にしながらも、ユニークな発想を次々とお話してくださった時の西堀さんの目が、さらさらとしていたのが印象的。エビステムの商品開発を進めるうえでも、とても刺激になりました。個人的には、落ち着いた色味が魅力的な赤いランプシェードが欲しいです！(笑)

岡野亜矢子

episteme

